The Japanese Association for Behavior Analysis(JABA)

1C01 日本行動分析学会 第33回年次大会
(2015年8月29～30日 明星大学)

けんかが多い小学生きょうだいへの介入
—母親との行動コンサルテーションの効果—

○小野 京子 ・ 日上 耕司
(大阪人間科学大学大学院修士課程)(大阪人間科学大学大学院)

Effects of behavioralconsultation with a mother onfrequency ofquarrels between her elder daughter andyoungerson)

Kyoko ONO, and Koji HIKAMI
(Graduate School of Human Sciences, Osaka University of Human Sciences)

Keywords:siblings' quarrels, stress of parenting, behavioral consultation

【問題と目的】

頻繁なきょうだいげんかは、母親にとって不愉快なストレス源となる。なだめてもなかなかおさまらず、けんかが激しくなるとついには感情的に怒ってしまう。うまく子育てできないという母親のつまずき感や自信喪失を引き起こしたり、子どものけんかのせいで1日気分が悪い、と母親の負感情を子どもに帰属させたりすることさえ起こる。浅川ら(1999)は、「子育てをしていて楽しくない」と感じる構造には、きょうだいげんかなどの「日常生活のトラブル」のカテゴリーが含まれており、「母親のストレス」との関連を示している。

本研究では、母親の育児ストレスの軽減を目的に、小学生のきょうだいげんかの減少への介入を試みたので報告する。なお、母親から学会発表の承諾を得ている。

【方法】

参加者 母親(40代後半)。家族構成は、父親(40代後半)と姉A(小学5年生)と弟B(小学3年生)の4人家族であった。A, B ともに特記すべき既往・成育歴はなかった。母親の主訴は、朝食時に、ⅰ) きょうだいげんかをやめてほしい、ⅱ)B に怒り感情が出現しても大声を出したりわめいたりしないでほしい、であった。

手続き 朝食時のAとBの様子を母親が観察・記録し、その記録をもとに週1回、母親と振り返りを行った。振り返りでは、1日ずつ母親の介入の仕方とその効果を確認した。「けんか」や「大声」出現前後のやりとりに注目し、ここで姉をほめたら良かったのではないか等助言した。

①行動記録: 介入1週目までは IC レコーダーを使用せず、介入2週目から IC レコーダーを用いて朝食時の会話を録音した。いずれも記録者は母親であった。

②標的行動の定義: AとBの「けんか」は、母親が感情的だと感じた発語が、きょうだい間で3回以上続いた場合と、それ以下の回数でも手や足等での攻撃が加わった場合にカウントした。他の話題や感情的でない会話が間にはさまれた場合はそこまでを区切りと数えた。B の「大声」は、母親が必要以上の大声だと感じたネガティブな感情表現や攻撃的発言をしたときにカウントした。

③アセスメントおよびベースライン測定: 朝食時の様子を連続6日間記録した。AとBは度々けんかをし、Bはけんか時や登校準備の時間的余裕がない時に焦燥感から怒ったり大声を出したりした。また、けんか生起に母親が関わっていることがわかった。「けんか」→「母親が弟Bを擁護する発言または小言」→「Aはおもしろくない」→「B に対してよりきつくあたったりからかう」→「B が感情的になり、より過剰反応をする」という構図がきょうだいげんかの70%で見られた。

④介入: 介入1週目より、ⅰ) 母親はけんかが起きそうでもBを擁護するような発言・小言をしない。ⅱ)Aをほめるようにする、5週目より、ⅲ) B が大声を出した時に「どうしたん？」と聞く、6週目より、ⅳ) 現時刻を意識するためのアラーム使用(朝食中の一定時刻2回)、9週目より、ⅴ)「今の時間は○○。大丈夫、十分間に合うよ」と声掛けする、を実施した。

【結果】

各週の「けんか」と「大声」の生起数とこれらが生起しなかった日数の変化をFig.に示す。

①介入1～3週目: 2週目、母親が必要以上にA, Bへの注意を控えてけんかや大声が増加したため、必要時は今まで通り叱ることとした。②介入4～6週目: けんかと大声の回数は減少してきた。介入ⅰ)は概ねできているが、介入ⅱ) はできていない。B は集団登校集合に遅れると1人登校になることを嫌がり、集合時刻が近づくと焦って感情的になり大声を出しがちである。介入ⅲ) は大声の原因が明白でほとんどできなかった。③介入7～9週目: けんかと大声の回数はさらに減少した。B が出発間際になると、時間的余裕があっても、「もう間に合わない、だめだ」と思い込んで焦る様子が見られたため、介入ⅴ)を開始したが、「違う！もう間に合わない！」との返事がほとんどで、間に合う時間でも、遅れてしまうと思い込む誤った認識の修正はできなかった。介入9週目以降長期休暇に入り終了した。

【考察】

9週間を振り返り、母親はベースライン時期と比べると朝食時の気持ちが軽くなったと話し、けんかと大声の減少が母親の育児ストレスの軽減に有効であったと考えられる。また母親の気づきとして、Aをほめること(介入ⅱ)が意識的にも自然にもできていないことがわかった。行動コンサルテーションの方法論は、標的行動の減少と母親のストレス軽減だけでなく、母親が日常の子育てを振り返り、不足していた部分に気づく機会を提供することにも有効であったと考えられる。

【引用文献】 浅川潔司・鎌田陽世・横川和章・古川雅文 (1999) 母親の育児感情の構造に関する研究, 兵庫教育大学研究紀要, 19, 139-143.

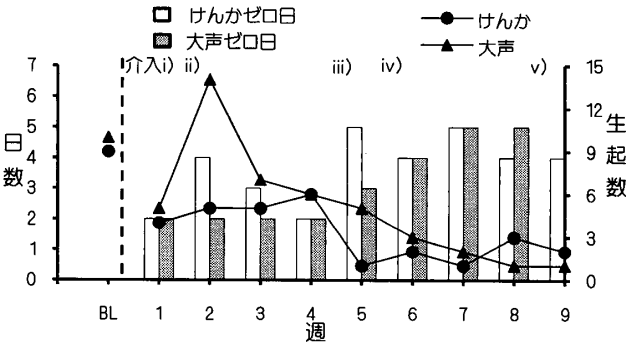

Fig. 標的行動生起数と標的行動生起数ゼロの日数

NII-Electronic Library Service